

横須賀追浜で育ち、相馬へ疎開（11歳の少女が見た大東亜戦争）

渡辺 美恵子さん（昭和8年生まれ）

私は横須賀市追浜^{おっばま}で育ちました。横須賀と言えば古くから軍港として栄えた海軍の街で、追浜飛行場には横須賀海軍航空隊が所属していました。軍人がいつも町中を歩いていました。

私は追浜国民学校に通っていました。通学する時は、みんな防空頭巾と救急袋をいつも必ず持っていました。救急袋の中身は、あて木（5×25 cmくらい）、包帯、三角巾、赤チンなどです。

私達子どもは「お前たちは少国民だ。」と朝礼のたびに言われていました。少国民とは、天皇陛下に仕える小さな国民という意味です。学校では訓練が毎日あって、朝礼で校長先生が話をしている最中にも、担当の先生が「空襲警報！」と言います。すると、グループに分かれて山の中に素早く逃げます。遅いグループは叱られました。訓練は1日に5、6回はありました。いつなんどき、訓練があるかわからないので、落ち着いて勉強もできませんでした。

給食はお弁当箱を持って行って、その中に、塩や醤油の味がついたおかゆの固いものを入れてもらって食べました。少しでも多くと、お父さんの弁当箱など大きいものを持って行った子もいました。でも、みんな同じように重さを量って配られました。

下校時は、行列のできているお店はどこか、見つけながら帰りました。食べ物を売っているお店は日によって違います。家に帰るとすぐに、籠にがま口（財布）だけ入れて、その場所に行き並びます。何が売っているか分からないことも多いのですが、並んでいれば何か食べ物が手に入ります。私が並んでいると、「お嬢ちゃん、こっちへおいで。」と列の前の方へ入れてくれるので、食べ物を買って、また最後尾に並びます。そうしてまた、前のほうに入れてもらって、食べ物を買います。何回か繰り返していると、お店の人もわかってきて、「お嬢ちゃん、もう帰った方がいいよ。」と言います。このようにして、私は家族分の食べ物を買集めていました。周りの人々は優しく、子どもは大事にされていたと感じる思い出です。

私の兄や弟は、学校で、竹やりや石投げの訓練をしました。石は共通の的に皆で一斉に投げるといふもので、ばらばらに投げてはいけないというものでした。4年生の頃になると、私もなぎなたの訓練をしました。あの長い柄のついた重いなぎなたを頭の上で振り回すことは至難のわざでした。

飛行場が家のすぐ近くにあり、頭上をよく飛行機が離着陸していました。一人乗りの飛行機で、何機飛び立ったか、よく数えていました。特攻隊の飛行機は、行きの燃料しか積んでいないと言いますが、ここから飛び立つ飛行機には、往復の燃料が積んであります。飛び立つ飛行機を数え、その一機一機に「行ってらっしゃい」と手を振ります。ところが、帰って来るのは全てではありません。帰って来る途中、燃料が無くなり、海に墜落したり、近くの民家や空き地に墜落したりしました。家に落ちて、家が壊れはしても燃えないことがありました。燃料切れのためということでした。

校庭にいた兄の太ももに、飛行機から落ちた部品が当たったことがありました。大きな怪我ではありませんでしたが、「少国民を傷つけた。」ということで、すぐに軍の人が、当時としては珍しい果物の籠を持って、謝罪に来ました。

私の父は、横須賀海軍工廠（軍需工場）で飛行機の検査官などをしていました。追浜や飛行場のある館山を歩き来していて、ほとんど家にはいませんでした。

父はサイパンやパラオの飛行場造りにも関わっていました。久しぶりに家に帰って来た時に、連れれの二人が、バナナの大きな房を両肩に担ぐように持って来ました。その大きな房の一つだけが、黄色く今すぐにでも食べられそうなものでした。その房だけ、海水に漬けて来たというのです。海水に漬けると、早く熟すのかと、子ども心にも感心しました。

父は福島県の相馬で生まれました。早くから都会に出て出世しているということで、地元では名が通っていたようです。海軍工廠で働くため相馬から動員された学生達は、「何かあったら、和田の柴田卯十郎さん（父）を訪ねなさい。」と地元で言われたようで、よく家には、たくさんの方が来ていました。すると、母は、お風呂に入れて、おもてなしをしました。燃料が不足しているためいつもは近くの銭湯に行っている我が家ですが、その時はお風呂を沸かします。ふだんお風呂には水を張って、冷蔵庫代わりにバケツに入った食糧を入れてありました。それで、おもてなしをしていたのです。

ある日、母との銭湯の帰り、人だかりがあったので、近づくと、二人の若い水兵さんが座らせられており、二人の下士官が、軍靴でたたいていました。下士官に敬礼をしなかったからだということです。顔からは、血が出ていました。「どうして、はたく（たたく）の。」そう言った私の口をとっさに母は抑えました。人だかりを気にした下士官達は、「こいつらがいるから、今日はこれで終わりだ。」と言って去っていきました。

「弾丸切手」というものがありました。正式名称は「割増金附戦時郵便貯金切手」というもので、戦時中は、軍事費を賄うために全国の郵便局で発売しました。買うとそれが武器としての弾丸の資金になるということで、そう呼ばれていました。「弾丸切手」は隣組を通じて、半強制的に売られていました。切手は、茶箆筒のガラスのところに、束ねて見えるように飾ってありました。

私が5年生の時に、横須賀を離れ疎開することになりました。学童疎開は一般的には、空襲から逃れるために田舎などへ移り住むものですが、私達の場合、学校を学徒動員で召集された者たちの宿舎にするためと聞きました。そのころ、父がサイパンから帰って来ていたので、私達は縁故疎開で相馬へ行きました。

横須賀から相馬に疎開する時のことです。私達が品川駅で乗り換えて上野駅に行こうと駅の地下道を歩いていると、突然、大勢の人が地下に押し寄せて来ました。品川に空襲があったのです。人々が地下に逃げ込んで来ました。私は妹を背負い、ランドセルとおしめを持っていました。両手に荷物を持っていたので、親にしがみつくとはいけません。ここで親から離れたら大変という怖さで、私は必死に親の背後に頭をくっつけて歩きました。押されて押されて…人の流れに流されそうでした。

あの時の恐怖を思うと、今でも体が震えます。息子は、「品川駅の地下道も、きれいになったよ。」と言いますが、その場所を避けて、遠回りしています。

相馬ではご本家の隠居所に住むことになりましたが、歓迎されることはなく、余計な存在なのだと、子ども心にも感じました。母は、自分の着物や父の二重回し（男性用の和装防寒コート）などとお米を交換したりしていました。

学校の帰り、畑に行くと、「和田の卯十郎さんの子ども」だと知って、じゃがいもや人参を分けてくれました。私はここでも、家族の食べ物を探し集めていました。

田舎では、男たちは出征してしまい、人手不足でした。農業の働き手として子供たちが駆り出されます。私は、そのような友達5, 6人の宿題を一手に引き受けました。するとお礼に、米、菜っ葉、大根などがもらえます。先生は、同じ筆跡の宿題が提出されても何も言いませんでした。

学校では、疎開して来た子供の机はありませんでした。教室の一番後ろで、ランドセルを机代わりにして勉強しました。農作業に駆り出されても、疎開組はあまり役に立ちません。5人一組で、「もっこ」で土を運びますが、よろよろです。田舎の子ども達はたくましかったです。

今の子ども達は学校に行くとき、名札を付けていません。でも、私たちは、必ず名札を付けました。左胸に大きな名札をいつもつけていました。

まず、本籍地とそこの姓名・現住所・両親の氏名・自分の名前・年齢・血液型・そして学校名です。

戦争中なので、いつも命の危険にさらされていました。どこで何かがあっても、連絡が取れるようにしていたためだと思います。本籍地の住所とそこの姓まで書いていたことは、当時は連絡が取れない等の時は、親類縁者にまでも連絡をしたということでしょうか。なので、私の名札には、父の実家である福島県の住所と姓「柴田」が書かれていました。

戦争が終わり、中学生の時、松島への修学旅行で、忘れられないことがありました。仙台駅で列車を待っていると、食べ物に困っている姉妹を見かけました。駅弁の食べ残しを捜しているのかゴミ箱をあさっていました。それを見かねて、私はお弁当として持っていた2つのおにぎりをあげました。それは私にとっても食糧難の中大変貴重な物でした。

食べ物や住む場所が無い、同じような境遇の子ども達は他にもいました。私に続いて、他の級友もそこにいる子ども達に、おにぎりを分けてあげました。

もらった子どもたちの表情は忘れられません。あの仙台の駅で見た光景は、今でも鮮明に覚えています。戦争の犠牲者とも言える戦災孤児・浮浪児が、どれ程の苦勞をして生きようとしていたか、このことも、忘れてはいけない問題です。

戦争というと悲惨なことが多い中、私の記憶は、「あの頃は、子ども達は大事にされて、みんな優しかったな。」という思い出もたくさん残っています。あの優しさが、今はどうでしょうか。周りの人達との温かいつながりが薄れていっているようで、少し寂しいです。一方で、子どもたちが苦勞したことも事実です。子どもたちのためにも戦争は二度と起こしてはいけないと思います。



3歳ごろの渡辺さんと父、弟、兄

(原文のまま掲載しています)